

カトリック 仙台教区報

2010年1月3日 No.191
 発行
 カトリック仙台司教区
 980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
 Tel (022) 222-7371 Fax(022)222-7378
 発行責任 広報委員会
 URL <http://sendai.catholic.jp/>

年頭司教書簡

「祈りに心を注ぐ一年」で信仰共同体作りを

仙台教区長 平賀 徹夫 司教

仙台教区の皆様、救い主がお生まれくださったお祝いの雰囲気の中で、新しい年・紀元2010年を迎えました。主のご降誕と新年のお喜びを申し上げます。主である神が教区内の皆様お一人おひとりの上に豊かな祝福を注いでくださるよう祈念しながら、心からのご挨拶を送ります。

さて、現代世界はたくさん、それともますます複雑化する重大な問題に覆われています。その中であつてわたしたち教会は、父と子と聖霊の唯一の神を信じる信仰共同体として神からの光を輝かすようにと遣わされているわけです。世界の現実が複雑化していくのであればあるほど、逆に今年のわたしたちは単純な一つのことにもいつも立ち戻るよう心がけるといふのはどうでしょう。それは「祈り」ということです。わたしたちは祈りの意味を知っていますし、実際に祈ることがキリスト者信仰共同体の一番のしるしであり、力の源となるものです。そこでこの一年を、祈ることをより一層強く意識して過す「祈りに心を注ぐ一年」としたいと思いますがいかがでしょうか。共同体で祈る、家庭で祈る、グループや個人で祈る、

それも自分のためよりも互いに他者のために主の祝福を願う、そのような祈りをもっともつと心がけるのです。現代世界はわたしたちの祈りが必要としていますからわたしたちは祈りのうちに全世界を包むのですが、それにもまして、わたし



たち信仰共同体そのものも祈りを必要としています。何のためでしょう。神がこの交わりに呼んでくださった本当にかけがえのない存在である一人ひとりが、皆、主からの召命にこたえて存分に生きていくように、互いに支え合って一つの信仰共同体となるためです。そのようにして、世界に対して神の愛のし

るしとなっていくためです。

洗礼と堅信によって神の民・光の子らとして一つに集めていただいたキリスト者の共同体は信徒・司祭・修道者・求道者で構成されていますが、わたしたちの間でどれだけ「互いのために」祈ることを意識してきたでしょうか。わたしたちは、祈りの質や量への思いを深め、互いのために実際に祈り合うことに励みながら、信仰共同体としてさらに成長していくように努めたいと思います。

全世界の教会はいま「司祭年」を過ごしています。これにちなんで申せば、まず司祭の皆さん、司祭への召命を畏れながらも喜んで受けとめたわたしたちは毎日、感謝の祭儀や教会の祈り（聖務日課）その他で、教会や世界の人びとのために祈りますが、さらに例えば、信徒のためや関わりのある事業所や施設で働く人びと等のため、その中でも特にあの状況にあるあの人・この人・あの家族・あの子・あの病者のために、修道者のため、中でもあの修道院・あの使徒職に就いているあの修道者のために、同僚司祭のため、特に困難に直面しているあの司祭のために、等々、具体的な顔を思い浮かべながら、もつともつと強く主からの恵みを願って祈ろうではありませんか。信徒と修道者の皆さんはわたしたちが祈ることを求めています。このような祈りは、牧者とも

生命の泉

▼年末になると各地の大通りの樹々には小さな電球をつけて冬の夜を幻想的に演出する。冬の風物詩として定着しつつある。それも年々規模が拡大し、きらびやかさを競っているようだ。しかしこの飾りをもつとふさわしく私たちの心と家庭に移し替えるためには、優しく灯る小さなツリーも忘れてはならない▼

主のご降誕を待つアドベントの主役は洗礼者ヨハネである。彼は自らを「荒野で叫ぶ声」と名乗り、喜びをふさわしく迎えるために、「悔い改めよ」と荒野で叫んだ。荒野から誰にどれだけ響いたかわからないが、耳のある人には時を超え、処を隔てたところに聞いている人がいつもいた▼みことばはいつも逆説的な感じがする。例えば、私たちが最も深く思いを致すのは、身近な人に先立たれた時だ。寂しさの中で「もつとこうしてあげればよかった」、「あんなこと言わなければ良かった」など後悔の念と、共に過ごした懐かしい日々を回想する。この内面的な会話こそ祈りと呼ぶにふさわしい▼この祈りを今生きる場に持ち込んで、「新しい歩みを始めよ」と洗礼者ヨハネは言っているのではないか。



「差別はいけない」

司教 マルチノ平賀徹夫

日本カトリック司教協議会のもとに、難民移住移動者委員会、カリタスジャパン、正義と平和協議会、部落差別人権委員会の4委員会からなる「社会司教委員会」がありまして、わたくしは部落差別人権委員会を担当しています。この社会司教委員会主催のシンポジウムが今年度、福岡（3月）・仙台（7月）・名古屋（11月）の3ヶ所で行われました。わたくしは仙台と名古屋でのシンポジストとして参加し、部落差別人権委員会での活動を通して気づかされたり考えさせられたことなどを発表しましたが、「差別」は本当に厄介な問題です。

差別主義とは「現実のあるいは架空上の差異に普遍的、決定的な価値づけをし、おのれの特権や利益を守り正当化するために、相手がどう感じようがおかまいなく、差別的な攻撃を被害者に向けて行うというもの」（石井裕明著『差別原論』p.40）とありました。差別の問題を扱うとき、わたしたちは無意識の内にも「差別する側・される側」とに分け、自分は差別なんかしないからと第三者的な立場にいたがる傾きがあるようです。でも、自分も差別する側にあったということを、いつ思い知らされることになるかわからないのです。

もともと悪気があってなら論外ですが、何気ない話をしていながらも、「そんなつもりで言ったんじゃない」と弁解した経験はないでしょうか。この弁解自体も差別を感じさせてしまった自分を正当化するわざと言えるでしょう。人間は神の似姿として創造されたかけがえのない存在であると知っているわたしたちとすれば、どんな人をもも尊敬し大切に考える方・生き方はあたりまえのことです。でも「差別はいけない」は、まだまだ（死ぬまで?）、それは頭・理屈の上での了解事項にすぎないのではないのでしょうか。

呼ばれ、信徒と共に・人びとと共に歩む司祭としてのアイデンティティを固め、信仰共同体の交わりの絆を強める奉仕への確かな一つの道となるに違いありません。

支えていただきたいのです。このように祈る共同体の心は、司祭や修道者の召命を願う祈りへと続くでしょうし、青少年自身が自分の召命を考えることにもつながり、さらに、信仰共同体の中、および各家庭での子どもたちへの信仰の伝達にもつながっていくでしょう。

同じように修道者と信徒の皆さん、司祭のための皆さんの祈りは大きな力です。教区の司祭数が少なくなってきた現在、今まで以上に司祭のために、それも好きな司祭のためだけでなく、気が合わない司祭がいたとしたらむしろその司祭をこそ含めて、一人ひとりの司祭がその召命を生きるように主からの助けを願って祈り、

また信徒の皆さん、司祭や修道者および奉獻生活の道を歩む方たちのために祈ると同時に、信徒同士お互いのために祈ることに、もともと心と心をくぐりてくださったらありがたいと思います。信仰共同体は「キリストの体」で

あり、わたしたちはその一つの体となるために洗礼を受けたのです。「体の一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が喜ぶのです（1コリント12・26）」という聖書の言葉から力を得たいと思います。特に現今の社会情勢の中にあつて窮地に陥っている人はいないでしょうか。また、不可抗力あるいは人為的な原因によって、苦しんでいる家庭はないでしょうか。泣いている人はいないでしょうか。仲の良い人にだけ挨拶して他の人を無視するなどという傾きに流され

てはいないでしょうか。分裂という不幸はないでしょうか。見て見ぬ振りなどしてはいないでしょうか。いろいろな悲しい現実が確かにあります。しかし信仰共同体としてそれを乗り越える方向へと絶えず姿勢を整えていかなければなりません。それにはやはり「祈り」です。互いのために、そして共同体全体のために祈ることが不可欠です。個人での祈りの大切さと言うまでもありませんが、共同体として祈る姿勢は、感謝の祭儀（ミサ）での「共同祈願（信者の祈り）」の意向として表れるでしょう。各小教区では是非とも工夫してみることをお願いいたします。こうして司祭も信徒も修道者も祈りのうちに互いに結ばれ、「信仰共同体」として成長していききたいのです。

もう一つのことがあります。ご存じでしょうが来年度2011年は、函館教区設立から数えて120年、仙台教区と改称してから75年目にあたります。その節目の年を「教区の年（教区大会の年）」として祝おうということが決まり、その準備が始まりました。その動きに関する情報や広報は近日中に各小教区に届くようになります。仙台教区が信仰共同体として少しでも成長し、一緒に大きな喜びのうちにその「教区の年」

司教日程

1・2月

- 1・1 金 神の母聖マリア
- 2 土 オタワ愛徳修道女会
- 12 日 司祭評議会定例会
- 14 土 社会司教委員会勉強会
- 16 日 宣教司牧評議会・役員会
- 21 金 鶴ヶ谷墓地管理委員会新年会
- 25 月 教区司祭団月例会
- 26 火 あけの星会新年会
- 28 木 部落差別人権委・事務局会議
- 2 9 日 司祭評議会役員会
- 11 木 教区研修会・岩手
- 13 土 教区研修会・宮城
- 14 日 原町教会・堅信式
- 15 月 臨時司教総会
- 20 土 宣教司牧評議会・役員会
- 22 月 県別司祭の集い
- 26 金 部落差別人権委・定例委員会

を祝うことができるように、今年の「祈りに心を注ぐ一年」を精一杯の思いをこめて過ごしたいと思ひます。

教区の現状を直視しますと、難しい問題がいっぱい目に付きまします。でも、「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている（ヨハネ16・33）」とおっしゃった主は、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と約束されました。その主への信頼のうちに日々をおさげしてまいりましょう。

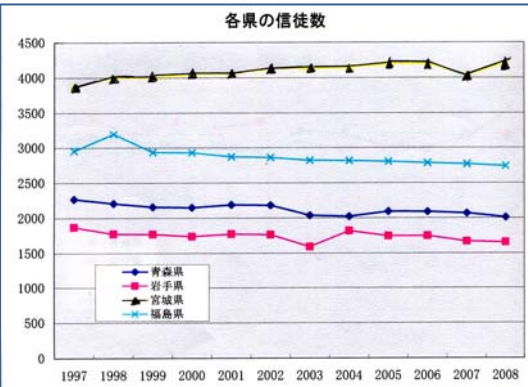
2010年1月1日

教区の現状を知り、積極的な協力を

福島県教区研修会

10月 日に行われた宣教司牧評・役員会の席で、教区研修会の概要が話し合われ、翌日には福島県の連絡協議会で「福島県教区研修会の持ち方」について話し合いが行われ、予定されていた11月1日実施に向けての「要項」が審議された。日曜日単位で動く教会という世界では、実施まで日曜日が2回しかないことから、審議のその日のうちに「要項案」を訂正して、印刷。会議に出ていた各小教区代表に配布した。

次の日曜日の11月1日に信徒の皆さんに周知、そして次の日曜日の8日に各小教区が希望をまとめるという、周知期間



も極めて短く、余裕のない厳しい日

程だったが、それでも開催日の1日にはほとんどの小教区から出席。参加者は0名を越えた。テーマは『教区の現状と積極的な協力』。日程は午後からの半日で、司教様の講話、グループでの話し合い、全体での各グループからの発表、そして司教様の指導という、流れであった。司教様のお講話は、『教会憲章』や『現代世界憲章』を引用されながら、仙台教区の信徒数の推移Ⅱ図Ⅱや洗礼数の推移、教会維持費納入状況などを素材に、具体的な課題に迫るお話と、『カトリック生活』と『新教会法典』からの引用による内容であった。ゆっくりとわかりやすく丁寧にお話くださった司教様の講話は、よく理解できた。

グループでの話し合いは、具体的な数字を資料とした「仙台教区の現状と私たちの課題」と、雑誌『カトリック生活』から司教様を選ばれた「カトリック・ライフ」を読みながらの「信徒としての私たちにできること」という、二つの小テーマに分かれての、五つのグループでの話

し合いであった。参加者のご協力でグループでの話し合いも順調に進んだ。ただ、参加者には、会がスムーズに、進むために各グループのリーダーは「司会者の事前研修」を行うと、研修の効果が得られるのではないかと。福島県でも、このことは大切だと実感した。

いずれにしろ、自分や周囲の信仰問題が、社会とのつながりにおいて「証」（あかし）となるためには、信徒が一層の研修を重ねることが必要だと痛感した「教区研修会」であった。

(佐藤 大)

福島県カトリック・グロリア会 結成20周年を祝う

11月22日（日）いわき教会で、同会結成20周年記念の集いが行われ、約45名が参加した。同会は、『健常者・障がい者の枠を越え、一人ひとりが霊性を深めながら福音宣教をしよう』との目的で1989年に結成された。

式典では、清水文雄会長が、会の歩みや目的などを話し、来賓の祝辞に続いて昌川信雄神父（クラレチアン宣教会）の記念講演が行われた。昌川師は、神父になる前、当時の平教会の



信徒だった。

8月に新潟で病障連全国大会が行われた際、講師として参加されていたが、いわき教会からの参加者と出合い、そのご縁で今回の講師をお願いした。

講演では、97歳の母親を介護した経験をもとに病者や障がい者への接し方などについて話された。

最後に、平賀司教主司式のもとミサがささげられたⅡ写真Ⅱ。

同会は、現在会員約50名、そのうち20名ほどが障がいを持っている。主な活動は、霊性を深める研修会や黙想会、会報の発行などを行っている。また、仙台教区内各県の病者・障がい者の会との交流も行っている。

指導を仰いだ当時の佐藤千敬司教は、「会員が増えるとか減るとかは問題ではない、神様

がこの会を必要としているなら、たとえ人数が減ったとしてもなくなりません。神様を信じて安心して目的達成のため祈りに専念するように」と励ましてくださった。以来、この言葉に支えられ、このたびの「20周年記念の集い」を迎えることができた。

財政面でも「必要なものは必ず主がご配慮くださる」との、かつての指導者スロイテル神父（サレジオ会）の言葉を信じ歩き続けている。

小さく、弱く、貧しい者たちが、キリストの十字架を共に携え、主がいつも私たちと共にいてくださる信仰によって、賛美と栄光のうちに活動を推進していきたいと思っている。

(会長 清水文雄)



いわき教会 飾

カトリックの精神を生徒たちに!!

第24回東北カトリック学校教育研修会

11月6日(金)、7日(土)、仙台開催)。今回は、「生徒たちになぐカトリックの魂」というテーマのもと、仙台教区の平賀徹夫司教、新潟教区の菊地功司教をはじめ各校から計130名を越える参加者による研修会となった。一日目は、午前中に会場の中学校・高等学校連盟(現会長 佐野督郎 聖ドミニコ学院中学校・高等学校校長)主催の、仙台教区と新潟教区計7県、11のカトリック学校による研修会で、1968年から行われている「生徒につながるカトリック教育」と題した基調講演が行われた。講演では、前半でキ



リシタン時代の教育理念を振り返り、後半では明治以降の日本の教育における教養主義の流れを概観して、現代が失ってしまった教養主義の伝統と徹底した個人指導の大切さが指摘された。

出来ることをする

ドミンゴ・エドガール修道士

(ラ・サール会)



一日中、一年中、どんな時も、道・真理・いのちである神は常に存在しておられます。そして、独身者・既婚者・修道者・奉獻者・司祭それぞれが特有な召命を通して神について来るように神が呼びかけておられます。私たちは、たぶん自分に問いかける必要があります。《神は私たちに何を望みだろうか？私たちがそれに何とお応えしたらいいだろうか？》ラ・サール会の修

招きにこたえて

26

が理解できます。

私は自分の弱さを知るが故に、日本に来ることに迷いが生じましたが、すでに日本で働いている先輩たち一人ひとりのことを思い浮かべて、自分に言い聞かせました。《出ることをやればいい…あと

道士になってから、私は神が現実的な実在者であることを深く納得しました。誰でも、神の实在を真剣に瞑想するなら、自分の召命が強められるように神はその人の生涯を通して呼びかけられていること

私たちは自分自身の弱さに気づいていますが、たくさんの周囲の協力者のお陰で強められます。私の場合は、ラ・サール会の仲間たちに助けられています。一人ぼっちのようでも誰かがいてくれます。私たちは、それぞれ神の娘や息子として、世界の変革という大事業に取り組み、その実現の可能性を信じています。それは不可能な夢物語でしようか？…でも《出来ることをする》のです。

仙台教区司祭の集い

(土倉)

二日目は「宗教部会」、「生徒指導部会」、「進路指導部会」、「教務部会」、「生徒募集対策部会」の五つの分科会に分かれ、各校からの話題提供のもと活発な意見交換、情報交換が行われた。教務部会には中央教育審議会副会長の梶田叡一氏も指導助言者として参加した。研修会は会場の「ロザリオのマリア聖堂」で3人の司教による共同司式の歌ミサで荘厳に締めくくられた。今回の同研修会は2年後八戸聖ウルスラ学院高等学校を会場として行われる予定である。

「教区の年」(仮称)

準備委員会始動!

「教区の年」(仮称)は2011年に仙台教区として75周年、函館教区時代から120年を数えるのを機に、これまでの教区の歩みを神に感謝し、神の恵みと導きに希望を置く1年とする趣旨で行われることになった。

今年の3月の宣教司牧評議会の決議を受け、平賀司教様が開催を決めた教区の年(仮称)は9月の同会において期間開催(2011年6月〜2012年6月までの1年間)で行うことも決められ、更にその準備を宣教司牧評議会役員会から教区大会準備委員会へと移行した。

その第1回目の委員会が11月21日に開かれ、教区側から梅津師小松師、ほか4名の委員が集まった。話し合いは、先ず教区大会準備委員会の目的、役割、タイムスケジュール等の確認とタイトルのネーミング、1年を通しての企画をどのようにするか等が検討された。第2回は12月に開かれる予定である。信徒の皆さまの意見は各県の信徒連絡協議会、宣教司牧評議会等で吸い上げられ、準備委員会へと報告される予定である。信徒の方々の意見 wait っている。(教区事務局長 小松史郎)

また、来年度からカメルーン出身のエミール・エテメ師(ケベック会)が加わることになり、

「第35回正平協・全国集会さいたま大会」に参加して

「戦争を起こさないうために…」
基調講演で中川村村長（曾我逸郎氏）が力説

10月10日から12日まで大宮教会を主会場に、さいたま・東京・横浜の3教区にまたがる18会場で分科会が行われ、延べ1500人が参加した。

仙台正平協からは7名が参加し、写真、全国の各教会で社会問題に取り組んでいる仲間たちとの交流を深めた。

大会初日は、長野県中川村村長の曾我逸郎さんが「戦争を起こさないうために。私たちが頑張れること」と題して基調講演を行った。

曾我さんは、経済主義によらず、普通に食べて助け合う生活の実現を目指している村の村長さんである。

講演では、昨年夏に行われた長野県戦没者遺族大会と戦没者追悼式に参加した時の疑問に感じられたことを話された。

追悼式で挨拶に立った人は、誰もが「戦争で亡くなった方々の尊

い犠牲があつて、現在の日本の平和と繁栄があることを、私たちは一瞬たりとも忘れてはならない」という。しかし本当にそうだろうか。戦争の犠牲がなければ、平和と繁栄が得られなかったのか。もし戦争がなかったら、平和で、犠牲になつた兵士や、市民が元気に活躍し、それぞれの夢



また、「世界の恒久平和実現に向けて一層の努力を傾けることを、戦争の犠牲になつた皆様の前でお願い申し上げます」という。さらに、「今も繰り広げられる地域紛争に心が痛む」ともいう。なのに、なぜ「テロと戦争」に加担していることを不問に付すのか。誤爆などで、子供を含む多くの一般市民が犠牲になつ

や計画にまい進していたら、今の世の中は、もっと良いものになつていたのではないか。戦死した人々は、戦争で犠牲になることを強いられることによってではなく、農業や得意とする技術や自らの構想を実現することによって、日本や社会に貢献することを望んでいたはずだ。私たちはかけがえのない人たちを失つたのだ。破壊と殺りくが、どうして平和と繁栄に貢献するのだろうか。

生活を見直して地球を大事にしましょう

最近、加藤陽子東大教授の“それでも、日本人は「戦争」を選んだ”という本が話題になっています。何かを選択するとき、「大事にしたいこと」を思いだすことが、新しい視点を見出すチャンスになるのではないのでしょうか。

日常の中で、ちょっと生活を見回してみましょう

私たちが捨てるゴミは、本当に“ゴミ”なのでしょうか。「ゴミにしている」のではないのでしょうか。生ゴミは家庭ゴミの約50%を占めています。

＊生ゴミは畑の肥料です。…自治体でコンポスト容器に補助金を出しています。

＊果物の皮は立派な洗剤です。…油污れの食器をきれいにします。

＊濡らさずに新聞紙に包んだり、干してから捨てましょう。

＊冷蔵庫をチェックして適量の食材を求めましょう。

食べ物を大事にすることは、いのちを大事にすることにつながります。神様からいただいた恵みをたいせつにしましょう。
宗像（元寺小路教会）

18会場で行われた分科会テーマ

- ①ダブルの子、～外国籍の人と日本人の間に生まれた子たち～／上福岡教会
- ②生存権／大宮教会
- ③外国人収容所～あなたは、日本にこんな場所が存在しているをご存知ですか？／大宮教会
- ④憲法20条と靖国神社～解説と現地見学で考える～
- ⑤（現地学習）平和学習～丸木美術館『原爆の図』と埼玉平和資料館を訪ねて～
- ⑥講談で『死刑と裁判員制度』を考える／川口教会
- ⑦フツのオジサン・オバサンのための「正義と平和」／大宮教会
- ⑧貧困と闘い平和を築く／上尾教会
- ⑨信仰・労働そして社会／四谷ニコラ・パレ
- ⑩（現地学習）秋父事件～圧制を変じて良政に改め、自由の世界として人民を安楽ならしむべし～
- ⑪病を得て初めて知る差別と偏見～HIV陽性の当事者と語り合ひましょう～／さいたま教区事務所
- ⑫（現地学習）ハンセン病回復者との出会い～多摩全生園で学びましょう～
- ⑬足元から暮らし方を考える～食・農・いのちを守るために～／北浦和教会
- ⑭（現地学習）核のない世界を目指して～東京湾の原子力空母を考える～
- ⑮（現地学習）狭山事件
- ⑯（現地学習）田中正造を訪ねる～亡村谷中に復活と非戦・平和を貫いた田中正造を訪ねる～
- ⑰多民族・多文化の人たちで構成される私たちの社会・教会～違いを超えて、平和のために共に祈る～／川越教会
- ⑱福音と平和憲法／浦和教会

なぜ何も言わないのか。また、靖国神社が純粋に追悼の施設ではなく、明治2年の創建以来一貫して次の戦争に向けて国のために死ねる兵士を用意するための施設であった。先の戦争は、「やむを得ない戦争」だったという。つまり、もう一度同じ状況になれば、また戦争をする、ということだ。国のために死ねる兵士を準備することをやめて、遺族会も含め、殺し合いはいけないうという当たり前のことが、当たり前に受け入れられる世界を作っていかなければならないと力説された。

公開講演会・仙台中央地区教会連絡協議会主催

『生きるって・愛するって』

「車椅子から語る熱い思い」 講師・大石邦子氏



一般市民の方々に教会を知
つていた
だこうと
企画した
公開講演
会、福島

県会津美里町在住のエッセイ
スト大石邦子さん「写真」を講
師に迎え、11月14日(土)元寺小
路教会大聖堂で行われ、約160名
が集まった。

ハンセン病問題を考える②

2009年は日本のハンセン
病問題の大きな節目の年です。ひ
とつには隔離政策が始まってか
ら百年。そして通称「ハンセン病
問題基本法」が施行された元年で
す。また、1世紀にハワイで見
捨てられていたハンセン病患者
のため、はじめは救済に力を注
ぎ、そして救うのではなく共に生
きることを選び、自身もハンセン
病に感染して亡くなったダミア
ン神父が、10月に聖人に列せら
れました。

そこで今回は、ハンセン病問題
と宗教について取り上げたいと
思います。

日本で隔離政策が0年も続け
られてきた理由のひとつに「隔離

この人はどんな悪いことをし
てこんな姿になったのだろう
と衝撃を受けた。

病床で精神的に追い詰めら
れていったとき、なぜかそのキ
リストの姿を思い出した。

あの人なら今の私の苦しみ
を分かってくれるのではない
か…と思った。それから少し
づつ聖書を読むようになり、心
に残る聖句などをメモするよう
になった。病状が悪化し、命の
危機が迫った時、母はそのメモ
を見て、友人に頼んで神父様を
よび、臨終の洗礼を受けた。

生きていく上で喜びをもたらすとの
理解がありました。病氣とそれゆえ
の隔離の苦しみを受け入れ耐え忍
び、喜びと変えて療養生活を営んで
いくための支えとして、キリスト教
は役割を果たしてきたとも言えま
す。

国の隔離政策を問うよりも、患者
が隔離され人生を奪われたことを
「ゆるし」「受け入れる」ために多
くの役割を果たした。「ゆるしな
い」「受け入れなさい」という言葉
が、「耐えるべき試練」と「変える
べき問題」を混同していなかったか。
ここにハンセン病問題に対する宗教
の責任の重要なポイントがあると思
います。

(教区人権を考える委員会

御供真人)

入院中は、良い患者で看護婦
さんたちに嫌われないように
しようとしたが、そのストレス
を見舞いに来た母にぶつけた。
「こんな体になって何もかも
終わりよ」と言う。「何もかも
終わりなら、新しい何かの始ま
りよ」と言われた。父は、「な
にも心配することはないよ、私
は百まで生きて、一生お前の面
倒をみるから」と言ってくれた。
父も母もこんな体になった私
でも、生きているだけで価値が
あるのだということを教えて
くれた。

私の命は、私だけのものでは
なく、両親や、兄弟、友人や、私
とかかわりのある多くの人た
ちの命とつながっているのだ
と感じたとき、私は誰かのため
に役立つ生き方をしたいと思
うようになった。

戦後の日本で、貧しさの中に
育った時代の子供たちでも、親
の愛を感じて育った子供は、心
が豊かだった。今、豊かさの中
で生まれ育った子供たちの中
に、寂しさや、悲しみがある。
しっかりと抱きしめて「大丈夫
だよ」と伝える親の愛が必要な
のだと思う。

「何があっても楽しく生きま
しょう」という大石さんの言葉
には重みがあった。(文責 岩井)

東北新生園

カトリック暁の星教会訪問

宮城県北部、登米市迫町に、
国立ハンセン病療養所「東北新
生園」がある。その中に、カトリ
ック暁の星教会(築館巡回教会
「写真」(信徒会長・津島清)が小
高い丘の上に堂々と建っている。
カトリック正義と平和仙台協
議会(会長・渡辺清)は、20
07年10月から、第2土曜日の
午後1時から暁の星教会で行わ
れるミサに数人のメンバーが参
加している。

11月21日(土)は、1950年



から200
7年の間に
東北新生園
で亡くな
れた45名
の方々のた
めの追悼ミ
サが行われ
た。

東北新生
園は今年10

月24日に開園70周年を迎えた。
現在、入所者は女性68名、男性
69名。入所者の高齢化が進み、
教会でもミサに来られる方は4
名で、8名の方は病床にある。

月1度の訪問ではあるが、い
つも温かく迎えていただき、ミ
サ後の談笑を楽しみにしながら
訪問している。(渡辺清)

活動紹介

一足お先にクリスマス&
イルミネーション点灯式

春風の家 小野敬子

12月5日(土)午後4時半から、今年で4回目となるスペルマン病院のイルミネーションの点灯式を、「春風の家」の会員の方をはじめ、病院関係者やご近所の方々と一緒に行いました。病院理事長の鷹嘴神父様が、およそ1か月半に亘って灯される光が、人々の心に希望と平安を与えるものとなりますようにとの願いをこめて祝福をさげた後、子供たちによって点灯のボタンが押されると、病院前庭の木々に取り付けら



れたイルミネーションが一斉に光を放ち、大きな歓声が上がりました。イルミネーションは夕方4時半から10時半まで、また期間は1月13日まで点灯することになっています。

私の気分転換

八木山教会 岡田千恵子

幼児洗礼の私は、全く何の努力もせずに、創造主にして真善美、愛の根源にてまします方を『神』と呼ぶカトリックの信仰を頂きました。この信仰を頂いたお陰には、ザベリオ以下、どれほど多くの

方々の愛と犠牲があったことかと、毎日感謝、感謝です。

さて、私はまことに、お金のかからない趣味を持つてゐます。《鉛筆一本》あれば、い

川柳、《全く自己流》で、ただ語句を並べるだけのものですが、情感のある日々の暮らしの記録にもなり、日記の役目も致しますので、感謝しながらたのしく続けて居ります。

【短歌】

◇入浴の度毎想ふ 如月の

河原水牢 殉教者らを

【俳句】

◇夕焼けや美の根源の 神讃美

【川柳】

◇金様が 神様よりも偉くなり

(原文のまま)

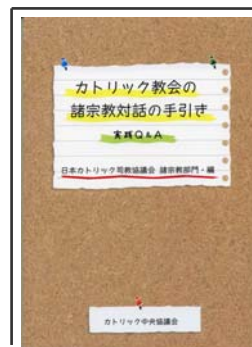
また点灯式に先立って東仙台教会をお借りして開いたコンサートⅡ写真Ⅱには、教会は初めてという方も大勢お見えになり、ギター演奏や透き通るような歌声にしばし時を忘れて楽しまれたようでした。終演後、用意した温かいスープや思いがけないお菓子のプレゼントに、受け取ったどなたのお顔にも笑顔があふれていました。私たちは、クリスマスシーズンに一般の方が教会に足を運ぶこの催しを、小さな宣教と考えて、これからも続けていきたいと思っています。

ミサを学ぶ

仙塩地区青年会黙想会

11月23日、仙塩地区青年会では、平賀司教様を講師にお招きして黙想会を行いました。今回は、事前に青年会の例会で、司教様に指導していただきたいテーマを募り、それに沿って講話をいただくという形を取り

り、「ミサについて学ぼう」というテーマに決まりました。講話では、ミサの本来の成り立ちや意義、第二バチカン公会議以前と以後でのミサのあり方の変化など、聖書や典礼憲章の解説を交えながら、とても丁寧に説明していただき、質問にも詳



しく答えていただきました。

皆でシチューを食べながらの楽しい昼食をはさんで午前と午後の講話と個人黙想の後は、各自が、その日に学んだこと、感じたことを振り返りながら、司教様と舟山神父様の共同司式のミサにあずかりました。

幅広い年齢、様々な立場の15名の青年が心を一つにして、「教会活動が目指す頂点であり、同時に教会のあらゆる力が流れ出る泉」であるミサについて考えることの出来た素晴らしい一日でした。(赤井悠蔵)



新刊案内

カトリック教会の

諸宗教対話の手引き 実践 Q & A

編者 日本カトリック司教協議会 諸

宗教部門／発行 カトリック中央協議

会／定価 860円＋税

日本のカトリック信者は、仏教、神道など諸宗教の人々と深いかわりをもつて生活しています。カトリックの信仰がすばらしいものだとかわかって、洗礼を受けたいと思っても、ある人々は、先祖のお墓を守っていかなければならない立場なので、自分の一存では洗礼を受けられないとおっしゃる方がいらつしやいます。

本書は、以前出版されていた「祖先と死者についてのカトリック信者の手引き」が品切れになったのを機会に、さらに内容を充実させ、多くの疑問点に、Q & Aのかたちで答えたものです。

第一部は「諸宗教対話の心」と題し、カトリック信者が基本的にもつていなければならない諸宗教への態度・心構えについてやさしく述べています。第二部は「諸宗教対話の実践 Q & A」で、この部分が本書の5分の4を占めています。実際、信者各人が、この点についてはどうしたらよいか、と思ひ惑うことなどが丁寧に質問に答えるという形で答えられています。

本書は司祭、各小教区の典礼担当者には必携のものであり、各小教区の「教会図書」に備えてあれば役立つものです。

仙台教区 2008 年度 決 算 概 要 -その 3-

今回は、「施設整備協力制度会計」「司祭召命活動会計」「海外宣教基金」の決算について概況を報告いたします。

○施設整備協力制度会計収支 2008.4. 1～2009.3. 31 (単位 千円)

収入の部		支出の部	
1. 分担金収入	6,543	1. 事務費	100
小教区	(6,543)	2. 援助金	0
2. 教区本部拠出金	3,000	3. 分担金返金支出	0
3. 受取利息	343	4. 財務支出	0
4. 財務収入	393	5. 次年度支払資金へ繰入	10,179
合 計	10,279	合 計	10,279

次年度繰越残高 1 0 4, 3 6 4 千円

I. 前年度対比

収入～小教区分担金で 1 5 0 万円減少している。前年度収入が特殊要因（1 教会で 100 万円増額、4 教会で 2 年分一括振込した）により増加したもので、今年は平年並みの収入であった。

支出～「資金援助」「資金融資」とも申込みがなく、事務費の支出のみであった。

II. 「施設整備協力制度」とは

1. 十数年前の調査では、仙台司教区の 9 割の教会は何らかの改修の必要に迫られている状態であったが、大半の教会は、自教会単独では資金面で困難な状態におかれていた。

その中で教区内での協力態勢を整える必要があり、種々の検討を重ねて本制度が発足した。

2. 要綱の目的には次のように記されている。「カトリック仙台司教区の各教会が福音の精神に基づいて相互に協力し、小規模な教会の改修工事等を円滑に進めるなど、教会施設の整備・充実に寄与することを目的とする。」

3. 財源の分担と事業の対象先は仙台司教区内のすべての教会となる。

A. 財源の分担

イ. 各教会は ①維持費収入年額の 7%に相当する金額、あるいは

②維持費納入者 1 人当たり月額 200 円を目安に算定した 1 ヶ年分の金額、のいずれかを分担金として負担する。

ロ. 教区本部からの拠出金および寄付金で
毎年度 1000 万円を調達する。

B. 事業

イ. 改修工事等に要する資金の援助（小規模教会に対して: 1 件 150 万円を上限）

ロ. 改修工事等に要する資金の融資（教区内全ての教会に: 1 件 3 5 0 万円を上限）

◎詳細は各県の委員にお尋ねになるか又は制度要綱をご覧ください。

○司祭召命活動会計収支 2008.4. 1～2009.3. 31

収入の部		支出の部	
1. 司祭召命活動献金	5,721	1. 養成費	770
小教区	(5,351)	2. 司祭召命活動費	760
修道院	(370)	3. 教皇庁援助事業献金	120
2. 宣教地司祭育成献金	680	4. 事務費	140
3. 教区司祭団拠出金	500	5. 基金へ繰入	5,427
4. 受取利息	316		
合 計	7,217	合 計	7,217

次年度繰越残高 6 1, 0 4 2 千円

前年度対比

収入～司祭召命の小教区献金が 144 万円減少している。90 万円程は 09 年度に送金された分があるが、傾向として徐々に右肩下がりになっている。

支出 ～ 神学生希望者への活動支援支出があった。

司祭養成のため、教区内の小教区と修道会よりの「司祭召命活動基金」と「宣教地司祭育成献金」及び 教区司祭団よりの拠出金が原資となっている。

近年は「教区の神学生」がいなかったもので、「養成費」として東京神学院の分担金支出が主たるものとなってきた。

神学校が「日本カトリック神学院」に統合され、2009 年度より「運営基本分担金」は平年度 約 185 万円の支出となる。また、神学生 1 名毎に 150 万円の「養成費」を支出することに変更となった。

※参考

2009 年度「日本カトリック神学院」の神学生見込数は 48 名 うち 新入生は 10 名です。

神学生数ゼロの司教区は 残念ながら仙台と新潟です。一日も早く、数多くの神学生希望者が仙台教区に生まれ、新司祭の誕生が熱望されます。

○仙台教区海外宣教基金会計収支 2008.4. 1～2009.3. 31 (単位 千円)

収入の部		支出の部	
1. 海外宣教基金献金	843	1. 援助費	0
小教区	(486)	2. 基金へ繰入	923
修道院	(357)		
2. 受取利息	80		
合 計	923	合 計	923

次年度繰越残高 1 5, 3 9 0 千円

この基金は、教区内から海外での宣教のために派遣される司祭、修道者、信徒の方々への支援に用いられます。

最近の援助支出は、2005 年度 モンゴルでのミッションプラン遂行のため、淳心会（スクート会）モンゴル管区長 カセムアナ神父よりの財政援助要請があった。これに応えるべく 2005 年度献金全額 1、2 1 4 千円を支出しています。

また、ここ約 10 年間の援助実績は、1997 年度、2001 年度、2005 年度の 3 回実施されています。

(会計補佐 小守林新策)